



Think globally, act locally.

杏林大学 社会科学部 菅原ゼミナール

2003年2月6日

日本銀行訪問レポート

日本銀行元総裁 三重野康先生との会見

三重野先生は、日銀に入社したのは本当に偶然だったとおっしゃっていた。満州育ちで、戦争を経験した人物だ。日銀は当時、勉強ができるだけではない、頭のいいだけではない、人々に上に立ち先導していきける人物を求めていると言う。寮長も務めたことのある三重野先生は、周りのお願いで仕方なしに日銀の入社試験を受けたと言う。それがたまたま入社試験をパスし、日銀に就職となった。辞めようと思ったことも何度もあったらしい。日銀に就職し、仕事をするのは私から思えばすごいことであるのに、三重野先生は辞めたいと何度もあったとおっしゃる。それでも逃げなかったと、逃げないで最後までやり遂げたことは、今も自分の自信になっている。『そして、自分だけの意見を通すのではなく、いつも相手の立場を考えて謙虚に生きることは人生の上でとても大切なことだ、ともおっしゃっていた。ここにも、笑うほど、頭を垂れる稲穂かな』を思った。まさに、先生は“実った頭”であった。

冒頭に述べたように、現在、三重野先生は杏林大学大学院で教えているが、大学院で教える前には、社会科学部で経済の講義をしていたと聞く。その時に思ったことは、『学生に自分で考える力が極めて足りない。』とのことだった。これは菅原先生からもお聞きしたことがあった。大学で勉強をするということは、高校までと違い、受身ではない。しかし、学生はそれをわかっておらず、いつまでも受身だと

私自身にもそれは当てはまることが多々ある。1、2年生の時はまさに受身だけであったように思う。ゼミに入って勉強するというのが少しわかってきたが、まだまだ自分で考えることが足りない。自分で考えることは、問題解決を模索する上で大事な部分である。社会に出て、経済だけではなく、流れを見極め、問題点を探し出し、それを解決する力を持つことは社会人として、一人の人間として、自分自身を高めることにもつながるはずだ。

三重野先生のおっしゃる二つの課題、逃げるな。相手の立場を考える。の二つに加えて、自分で考えることを私は三つ目の課題として自分に課したい。

日本銀行訪問レポート(2003年2月6日実施)

菅原研究室 四年生 丹内 見維

先日の三重野先生とお話は、どうも座談会の域を出ず、内容的に盛り上がった会とは言えなかった。せっかくの日銀総裁経験者との会談なのだから、現在の日本経済の根幹に関わるようなお話をもっと聞きたかったと思う。これを機会に専門的な用語や知識を、ほんの触りでもいかに実感として認識したかったといふ私の期待は、ほとんど達成されなかった。あれでは新社会人としての研修イベントが目白押しの中、わざわざ時間をつくって参加した意味がまったくない。私個人としては、三重野先生が憤慨してしまうような不躰な質問をどんどんして、良くも悪くも盛り上がるような、エキサイティングな会談を予想していた。現在の日本経済停滞の一因に銀行が関わっていることは否定できないだろう、三重野先生にはかつての日銀総裁としての責任が少なからずあると私には思えるからだ。なぜバブル経済は加速してしまったのか、なぜ90年代は失われた時代になってしまったのか、なぜ不良債権は処理できないのか、なぜ今の銀行には自分のことしか考えていないような運営ばかりが目立つのか。日本経済の停滞、いや沈滞を打開するために銀行が、日銀がなすべきことは一体何なのか。質問したことは山ほどあったし、そのほとんどは私の中では三重野先生を仮想敵とするものばかりであった(その方が会が盛り上がると思ったからであるが)、しかしながら実際はなんととも和やかな会に終始してしまった。かろうじて最後にそれらしい質問ができたが、あれでは焼け石に水であった。それどころか、それまでのアットホームな雰囲気やぶち壊しにしてしまったようで、かえって心苦しくなってしまった。結局あの日銀訪問で私の心に残ったものは、日銀館内の仰々しい赤絨毯に歴代総裁の肖像画、三重野先生の柔和なお顔、あとは見送ってくれた女性が結構かわいかったぐらいのものである。

冗談はこのくらいにしておいて(もっとも半分以上は本音だが)、あの座談会で私が印象に残ったのは、やはり最後の質問で三重野先生が答えられた内容だ。公的資金投入とそれに伴う銀行国有化について、三重野先生はきっぱりと「NO」を示された。やはり「銀行サイドは民間であれ、日銀であれ、国有化には反対ということなのだろうか。私としては、現在の各行の中小零細企業に対する貸し渋り、貸しはがし現象と大企業のみに対しての寛大処置を見る以上、日本の銀行は端的な成果主義に陥っているように見受けられる。経済不況の中では、短期的に業績を向上させる経営が期待されるのは仕方が無い。しかしそれは一般企業に対してである。投資という運用を司る以上、銀行は一般企業とは違う。短期的、短絡的な運営方針を選択するわけにはいかないのではないか。むしろ五年後、十年後の企業像を見据えた投資、援助を行うべきではないか。現在の日本は淘汰の時代である。新旧が交代し、新しい勢力が芽を出し、勢いを伸ばす時期である。この時期に銀行がすべきことは、将来の日本を背負って立つ企業や技術集団、アイデアなどを全力で支えることである。決して先の無い旧勢力を助けて、将来有望な新勢力の芽を摘み取ることではないはずだ。とは言え、「強きを蹴散らし、弱きを助ける」といった銀行運営が今始まれば、もっと多くの悪影響が発生する可能性もある。大企業が倒れれば、その関連企業も連鎖倒産してしまうからだ。結果的により多くの混乱が社会に生じることになるだろう。まさに「あちらを立てればこちらが立たず」の状況である。結局、不況下における抜本的改革など、絵に描いた餅なのかもしれない。

しかしそれでも、銀行は現在の運営を改めるべきだと私は思う。三重野先生は行政側と銀行側との信頼が欠落している今、思い切った銀行改革はすべきではないと言われたが、しかし一方でそのような悠長なことを言っている場合ではないことも確かだ。「日本経済はのっぴきならない所まできている。事態はひっ迫している」と言われたのも三重野先生ご自身である。しかし現実的に見て、銀行が運営上の大幅な軌道修正を早急に行うことは不可能であろう。これまでできなかったことが今日明日にできるようになるとは思えない。となればやはり公的資金の投入と国有化を行うしかないのではないだろうか。それにより現行の経営陣を一掃し、新しい運営体制を確立させた方がすっきりすると思われる。もちろん、ここまで銀行を追い詰めたのは行政側であることは明白だし、政府側にも政策面で回避不可能な責任問題がある。国有化した上にそれ以降の経営までも国が前端的に統括するとなれば、銀行自体の運営力が低下する恐れもある。なぜなら財務省、金融庁の官僚が現役行員より銀行運営に関する能力が高いという保障はまったくないし、単純に行員それぞれのモチベーションの低下という現象も起きるだろう。ではどうすれば良いのか。私は銀行の国有化はすれども、運営に関しては一切を銀行側に任せることにすればよいのではないかと思う。行政はサポートに終始するわけである。それでは何の変化もないと思われるかもしれないが、銀行自体の運営に疑問を持っているのはむしろ銀行内のミドル世代だと言われている。つまり現在の経営陣を一掃し、ミドル世代を中心としたプロジェクトチームを銀行運営の中心に置くのである。先にも述べたとおり、行政はその改革を前端的にサポートする。もちろん監督義務もあるが、その任務は民間有識者によって構成された監視監督機関を新たに創設し、完全なディスクロージャーを確立させる。これにより、銀行運営は行員自らが、またその業務内容は民間有識者の目によって常に監視され、かつ彼らにより分かりやすく国民に報告される。そして行政はその動向を静観し、必要時以外は表立った介入はしないという金融機構に関する新しい構図が生まれるわけである。道路公団民営化運営委員会は民間が行政を監視するというこれまでにない構図だったため、最初から円滑な運営はできなかった。しかし銀行は民間企業の一分野であることを考えれば、決して非現実的な機構ではないのではないか。

以上、素人考えで申し訳ないのだが銀行再生の一案を考えてみた。銀行改革を銀行自身にやらせるのは切腹とおなじである。幕末の志士ならば、義によってそれも真道と悟れるかもしれないが、残念ながら今日

本人にはそのような考え方はできないだろう 私だって真っ平ごめんだ。ならば介錯人が必要である。それを誰がやるのかで今の行政は右往左往しているように私には見えるのである。しかしどちらにしても私の考えでは、短期的にしる、長期的にしる、現在の銀行経営陣に改革の実行はできないと思う、その資格もないと思う とにかくたまった膿を根こそぎ取り出し、新しい力で銀行を再生して欲しいと考えるのである。

日銀レポート

4年 福間 海

先日、日銀の元総裁三重野先生にお会いした。デフレ進行下にある現在の日本経済、これからの日本を支えていく若者世代へのメッセージなど約1時間半に渡ってお話を頂く事が出来た。

現在のデフレ進行は国際的に見て、物価が高い日本経済を修正している、ということには私も賛成である。今後、サービス業により特化し、国際的な競争力を得る必要がある。日本のサービス業は世界的に見ても高水準であり、欧米などの先進国企業は「日本で成功すれば、世界で通用できる」というほど、日本の消費者の「眼」は肥えている。日本を旅行した外国人たちは「日本では電車がたった1分遅れただけでも車内アナウンスでお詫びしている」と驚いていた。中国や東南アジアの成長によって日本の技術力や生産力が相対的に低下しているため、サービス業の充実を図るべきである。

しかしながら、政府は景気回復に向けた構造改革として不良債権処理を急いでいる。中小企業の倒産が相次ぐ中での構造改革は景気の悪化を招く、と三重野先生もおっしゃられていたが、セーフティネットの構築が進んでいないにもかかわらず不良債権処理を進めることは社会不安を招く。現に、中小企業の経営者が借入金の棒引きを断られ、拉致・立てこもりに発展する事件が発生した。巨大銀行の不良債券は国庫による補填での焼却が検討されているが、強引な貸し剥がしによって中小企業は淘汰される矛盾が背景にはあると見られている。

竹中半兵衛のような天賦の才能を持たない平凡な私たちに出来る事は、日々の努力ではないか。そして高い志。先人に学び、日々の生活で実践する。真摯な態度で全ての現象から、多くのことを学ぶ。例えば幕末期、坂本竜馬は100人もいらなかった。1人いれば十分であった。しかし、「日本を変える」と志した平凡な若者は幾千人、幾万人も必要であった。今の私たちには知識も経験も無い。「大学の知識は社会にできればすぐに身につく」とよく言われる。また、「大学の勉強は実践ではあまり役に立たない」とも言われる。しかし、志はどうかであろう。学生時代にしか身につかないのではないか。社会に出れば否応なしに競争して行かなければならない。その場で志を養うことは不可能に近い。戦場に出てから天下を狙うことが不可能に近いことによく似ている。天下を狙うのであれば、まずは早い段階での志である。優秀な部下をそろえ、兵士を鍛え、民を豊かにする。その上で、同盟国を増やし、強豪国を牽制し、国土を広げていく。天下取りにはこれらのような布石が必要である。やがて、「勝てる」という確信が持てたときにだけ強豪国と戦うのである。なんの計算もなかつた戦うことは無謀である。偶然勝てることもあるだろうが、やがては滅びる。戦国時代に戦好きでよく知られる織田信長でさえ、武田信玄には戦いを挑まず、勝てる算段がつくまでは、ただひたすら腰を低くしていた。何事も志が大切である。

日本銀行本店訪問、三重野元総裁との会談を終えて思うこと

直面した困難から逃げない。相手の立場を考える。

杏林大学 菅原ゼミ 3年 今村 忠裕

2月6日、日本銀行を訪問し、三重野康元総裁と会談をさせていただきました。今回、このような貴重な体験をさせていただき、お世話になった三重野元総裁、菅原秀幸先生及び日本銀行の皆様にご感謝を申し上げます。

現在の日本銀行本店は明治中期の西洋式建築物としては、東京・赤坂の迎賓館とならぶ傑作といわれており、国の重要文化財にも指定されている。実際にネオバロック形式の建物は訪れる者を歓迎するに十分である。しかし、その重厚な造りは同時に排他的とも感じさせる。中に入り、2階へ上がると歴代総裁の肖像画が出迎えてくれる。



写真 :日本銀行 <http://www.boj.or.jp/>

元総裁の意見の中心は、構造改革と民間努力に集約される。構造改革については、景気を見ながら行われるべきであり時期が適切でない。また、構造改革は民間の努力によってなされるものであるということである。つまり、問題は企業努力のない民間企業が未だに多数存在することになる。今後、政府及び日本銀行として進めていくべきことは規制の緩和、撤廃をすることとい話してであった。しかしながら、規制は政府が設定したものであり、本来であれば自由な取引を阻害するものである。淘汰されるべき企業が現在まで生き残ってきたのは、他でもない政府の責任である。セフティネットの必要性をお話しされていたが、それでは本質的には政府の考え方は変化無しと言わざるを得ない。日本銀行の役割は、飲み会の酒の量を調節することだというまこと的確な比喻である。バブル期、呑み過ぎの状況では酒を取り上げてきた。現在、酒を飲まない国民達に酒を用意している。元総裁は、政府及び日本銀行のやるべきことはやっていると話された。その通り、限界まで酒を用意している状態であろう。しかし、国民は用意された酒を呑まない。呑まないのには理由がある。国民が呑まない事が問題だ、というのでは話にならない。先行きの不安や不信感が漂っていることは確かであるし、それは民間の努力では解決できない事である。

景気と物価についての話しの中で、どちらが先かとい話しがあった。物価が上がると景気が上がるという論理は成り立たず、景気が上がると物価が上がるといことであった。しかし、景気と物価はサイクルである以上、どちらが先かとい論議自体がナンセンスである。物価の安定が日本銀行の仕事であり、景気の上昇が民間の努力であるならば、その議論は責任の転移にほかならない。

つまるところ、景気の低迷は政府の責任を越える問題でもあり、民間の責任を越える問題でもある。日本国民として真剣に危機感を持つことが必要である。日本は現在まで、世界を牽引する経済を築いてきた。しかし、この景気低迷により自信をなくし、企業や役人のみならず、国全体として自己保身に走りつつある。およそ消極的な状況であり、目標が低い。社員が自分の収入を減らしたくないのであれば、どうすれば給料が上がるか考えるのではなく、会社全体の利益を上昇させる努力が必要なように、グローバリゼーションの中で一国の経済状況を考えるのではなく、全世界的な発展を目的とする必要がある。

以上、批判するしか能がないが、元総裁の現代の若者に対する思いには、強く反省する。現代の若者に足りないものは「自分で考える力」であり、倫理やモラルが薄れてきたのは、自分で考える力が衰えたからであ

る。文化を学ぶこと、教養を持つことが、道徳を養う手段なのだ。極端に言えば、勉強しない、本を読まないことがモラルを無くす原因といふことである。今までの自分を反省し、今後は一層の努力を持って教養を身に付けていきたい。

日本銀行を訪れてのレポート

杏林大学 3年 菅原ゼミ 岩崎雄樹

- 1.日本銀行を訪れて(三重野先生とお会いして)
- 2.考察
- 3.感想

1.日本銀行を訪れて(三重野先生とお会いして)

はじめに菅原先生へ、日本銀行とは普通に生活していたら全く縁のない場所へ行く機会を与えてくださって、ありがとうございました。

日本銀行本店を訪れて、今まで味わったことのない場違い感を覚えました。

中へ入っていくにしたがって、なぜ僕はここにいるのだろうと何度も感じました。

けれど、こんな体験は一生に一度と思い、全神経を集中させて、三重野先生のお話に耳を傾けました。

三重野先生と対面して、感じたことは、なんて人柄がよく謙虚な人だろうと感じました。私の想像では、恐おもてで、気むずかしい人だと思っていました。しかし、実際は全くの正反対でした。菅原先生がおっしゃっていたことですが、一流の人は威張らず、謙虚な姿勢とっており、私は全くその通りだと感じました。

2.考察

考察とらか、私がこの体験で再認識したことや、勉強になったことを述べます。

はじめに、一番印象に残ったことを述べると、今の学生にとって足りないものは、自分で考える力が乏しいというお言葉でした。私は、その言葉の意味をよく考え、自分自身と重ねあわすことで、勉強になり、再認識させられました。それは、私は自分自身の自己分析ですが、我が強く、つねに自分自身で物事を考え、自分なりの意見を持っているつもりでした。しかし、それは勘違いかもしれないと考えました。なぜなら、例えば何かの問題に取り組むときにまず私は自分自身の頭で考えるのではなく、インターネット、俗風、他人の意見を非常に参考にしていてそれらを自分自身の考えとしてきたからです。

ここで、再認識したのが、物事を考え、解決する際にはまず、原因は何か、なぜそうなるか、課題・問題・影響は何かと、このことを考えはじめの段階である程度自分の考えを固めることが重要なのではないかと感じました。もちろんその後、他人の意見や参考文献が必要不可欠にはなってくるが、まず自分自身で物事を考え、試行錯誤する過程が非常に重要になり、その過程で苦労した分が自分への貯金となると考えます。

そして、逃げるなどという言葉も印象的でした。私は、困難な場面にでくわすと、先送りにする、現実逃避してしまう癖があります。自分自身に勝つというのは、今後自分の中で一生つきまとう課題であると考えながら、今回のお話で自分の中で、やるときはやるといった、けじめみたいなものが、前向きになったと刺激されました。

最後に本を読むということです。本を読むということは、親からもよく言われてきたが、私は本を読むのが苦手である。なぜならば、字を読むのが極端に遅いからである。

しかし、本というのは漢字を覚えるだけでなく、様々な知識を学ぶことができ、新しい発見、視野が広がるというメリットを私も十分に知っている。

やっと最近、就職活動のため新聞に目を通すようになり活字にも慣れてきました。本を読みなさいという言葉をもらい、あ一本を読まなきゃと感じました。そして、思ったことはすぐに実行しなくては、意味がないと考え、毎日ではありませんが、眠る前に就職活動の本や経済学の本を読むといった、習慣をつけたいと強く考えました。そして、菅原先生の言葉ですが、継続は力なりという額頭に常に叩き込んでいます。

3 感想

感想として、貴重な体験をさせてもらったのは、いうこともありませんが、上記で述べた通り いろいろと心境の面で刺激され、湯を入れてもらったと感じています。

何より この体験をきっかけに私の中にある、しっかりしなくては、がんばろうという前向きな考えを少しでももてたと確信しています。本当にありがとうございました。

三重野総裁を訪ねて

3年 小澤 久美子

最初に貨幣博物館を訪問し、久しぶりの赤絨毯に感動していた私にとって、日本銀行(以下、日銀)の建物から中まで、例えようのない煌びやかな建築に何も言葉が出てこなかったことはいうまでもない。あの広い日銀で迷子になったことは、一生の思い出である。

私は、三重野総裁を訪問するにあたって、日本銀行についてあまりにも無知であったため、日銀総裁の歴史について追ってみようと思う

戦後の日銀総裁は、日銀出身者の後は大蔵省の出身者と決まっており 1979年からの5年間は日銀出身の前川総裁が就任した。前川氏は、総裁辞任後の1986年には戦時型経済の終焉を目指すレポート(前川レポート)を世に送り出したことで有名である。

前川氏の後任として1884年からは、大蔵省出身の澄田総裁にバトンタッチ。この時代に今回のバブルが作り出されたと言われている。バブルの頂点の1989年に日銀出身の三重野総裁が誕生し、三重野氏は池波正太郎の小説『鬼平犯科帳』の主人公『鬼の平蔵』になぞられて『平成の鬼平』と言われ、バブル退治の為に金融政策のユーターン(金利の引締め政策)を実施した。円高が進行する1994年12月に、大蔵省出身の松下総裁が誕生する。

誕生後の1995年4月19日に、円は79円75銭の史上最高値をつける。この円高の局面で、日本の輸出企業は海外への生産工場シフトを加速し、個人の資金も海外に(米国債中心)流れ出していった。この当時、ペイオフで保証出来る金額の上限は1000万円、無記名の債券は対象にならないなどが提案された。日本長期信用銀行、日本債券信用銀行、日本興業銀行などは、バブル時代の不動産投資による不良資産だけの問題ではなく、無記名商品の安全性そのものが心配され、その後だんだんとおちぶれていった。

三重野総裁の時には、日本銀行の目的でもある『金融システムの安定』を目指すにしても将来の日本経済のあるべき姿をも考え、政府に対し構造改革や規制緩和などの実行を促して日本経済を立て直すことで、結果として金融システムの安定を計ろうとする姿勢もうかがわれていた。

しかし、松下総裁になってからは、日銀は『金融システムの安定』を大義に目先の銀行救済のみを考え、近い将来に影響をもたらす可能性が非常に高い超低金利・超金融緩和政策を歴史上かつてない規模で強引に押し進めてしまったのである。これが、デフレを招き入れてしまったのである。

松下総裁は任期途中、1998年3月に日銀内の不祥事の責任をとり退任し、日銀出身の速水総裁が新し

い政策の舵取りをスタートする。その交代時期は、大きな変革の時期であり、1998年4月には、新日銀法が施行され、1942年以来初めて金融政策の独立を勝ち取ることとなった。

2003年3月、5年の任期をおえようとしている速水総裁は、『インフレ目標（一定の物価上昇率を設定して金融政策を実施）』を考案したが、金融政策の透明性を高めることを狙った枠組みであり、それを達成する手段やメカニズムの裏付けを伴って、初めて意味があったが、現在は、ゼロ金利であるほか、様々な構造問題が金融緩和効果を制約しているなかで、インフレ目標を導入しても透明性を高めるといふ本来のインフレ目標の狙った効果自体を期待することは難しいということからインフレ目標は適当ではないとした。現在は、消費者物価が安定的にゼロ%以上になるまで現在の量的緩和の枠組みを続けている。

少し長くなってしまったが、現行までの日銀の流れである。このような過程のもと、三重野総裁はこれからの日本経済に必要なものとして、4つのことについて話されていた。

まず、一つ目は『アイデアが経済に対する診断が間違っている。』ということである。構造改革は政府の仕事であると考えている人が多いが、構造改革の主役は民間であり、これからの世代を担う私たちであるということだ。

2つ目は、『意識改革』である。官民ともに経済に対する危機意識が足りない。すなわち、意識が足りないから、景気回復にはつながらないのである。今日、企業の構造改革をするにあたって、経営者の世代が年々若くなっている。これは、新しいビジネスモデルの改革によるものである。そのため終身雇用制などは減少しつつあり、能力主義の時代になっている。現在、就職をするにあたって、企業が求めているものは、意欲とアイデアである。アイデアを考案するには、現状を正確に把握しなければならない。しかし、今の日本の学生は考える能力や教養がたりていないというのが現実であり、物事をしっかり理解し考える力が養われていないため、心配されている。今後、IT産業が減退してくる中で中国・アジアに日本の経済はどう左右されるのか、見通さなければならない。そして、それに対処していくには、日本は経済の実態を変えなければならないため、やはり構造改革が必要とされる。

3つ目は、『規制の撤廃・緩和』である。金融市場の『空洞化現象』が進みつつあり、また不良債権問題などを契機に日本の金融に対する内外の信頼が揺らいでいる。このため、金融分野での思い切った規制の撤廃・緩和を進めながら、市場原理と自己責任原則に基づく金融市場の再構築と競争力強化、また、それに対応した金融制度の改革が不可欠である。これは日本産業の競争力を確保していく上からも急務となっている。今後もしばらく、一層の規制撤廃・緩和、公的金融の見直し、金融行政改革など金融制度全般の改革に経済界の立場から取り組み、公正かつ透明で、国際的にも整合性のとれた金融制度の実現を目指すなければならない。そのために、政府は変化の中でも収益が上がる環境を作らなければならないのである。

4つ目は『セーフティネットの構築』である。日本は淘汰されるべき企業のうち、生き残れない企業が退場するのが遅い。構造改革を推進するには、新しい時代への挑戦に失敗した企業は、それを温存するのではなく退場しなければならないということである。ここで、セーフティネットが重要なポイントである。低成長分野における失業のリスクを高める恐れがあることから、失業に伴うリスクを軽減させるセーフティネットを構築し、安心して働ける環境を整えていくことが求められる。こうした点からは、退職者の再就職に対する支援、雇用保険制度の整備などが必要である。ただし、このようなセーフティネットを整備していくに当たり、例えば失業給付の給付期間の単純な延長といった措置は失業者の就業意欲を阻害し、かえって失業率を高めてしまう恐れがある。従って、失業者の早期再就職へのインセンティブを高めることを前提とした制度構築について検討することが重要とされる。

以上の4つが、これからの日本経済に必要なものとして、取り組むべき課題である。3、4番目は政府の推進

する課題であるとしても、1、2番目は私たちの課題である。『政治・経済について知らない』などという言葉は通用しない。現状を正確に把握し、常に新しい情報に目を向け適応していかなければならない。今までの日本の教育制度がどうこうではなく、自分でスキルを身に付け、自分の道を切り開いていかなければならないということを、改めて確信した。

日銀レポート

3年 栗城 宏行

今回の、三重野先生とお会いできるという機会は、自分の人生の中でも、またとない貴重な経験となりました。今回のお話の中で、現在の日本経済のおかれている状況、これからの日本経済について理解することができたのと同時に、三重野先生の体験談など、貴重なお話を聞くことができた。今回のお話の中で、自分の今までの学生生活を冷静に振り返ることができ、自分に何が足りなくて、どのような事をしなくてはならないか、という事を考えるきっかけとなった。

第9講 「これからの日本経済」を読んだレポート

これから、日本経済が再び盛り返していくために、構造改革を実行することが不可欠であるという事を理解した。しかし、構造改革の主役は、あくまでも民間の仕事であるということはまったく考えていなかった。連日、テレビや新聞で、構造改革という言葉を目にするようになったが、同時に、その主役は政府であるかのような報道がされており、構造改革という言葉が誤解して理解していたことに気付いた。日本経済が盛り返すためには、構造改革は不可欠なのだが、マスコミからは構造改革は政府の仕事で、改革のおくれは、内閣のせいのような報道が多い。構造改革を正しく理解する事は、改革を実行する上で重要な事だが、誤った報道や面白半分の記事は、問題だと感じた。

また、構造改革について、理解できても、実行に移す事はそれほど簡単に行く事ではない事も、実際にお話を聞いて気付く事ができた。

例えば、コーポレートガバナンスを確立するために、金融制度を間接金融から直接金融へ変更する必要がある。そうすることによって、ダメな企業は淘汰されるようになり、市場における非効率な部分がなくなる。このことは、第9講のプリントを読んで理解することができ、すぐ金融制度を直接金融制度へと切り替えればいいのかと考えた。しかし、間接金融にもメリットがあることや、今までのスタイルを突然変えることが容易ではない事を知ることができた。

話を聞いて感じたこと

今回の三重野先生のお話の中で、「最近の学生には、考える力が乏しい」という事をおっしゃっていたが、まさに自分の事を言われているように感じてしまった。今回の機会を少しでも自分のみになるように、本を読むことを習慣にし、考える力を養っていくと決心するきっかけになりました。

おそらく日銀に訪問するということは、二度とないにせよと思うので、ただ勉強になったと感じるだけでなく、これから進路を決定付けていく上でも大きな契機にしたい。

日銀訪問レポート

3年 坂本 佑美

今回日銀を訪問して、また三重野先生にお会いして学んだ事、感じた事が多々あった。

1. 日本の現状と誤解について

2.日本人として

以上二点について書いていくことにする

1.日本の現状と誤解について

現在の日本は不景気でありデフレが続いているといわれている。もちろん私自身も同じように考えていた。実際のデフレを克服するためにはマネーを流動させる必要がある。しかし今の日本は貨幣的現象ではない。つまりデフレという言葉を使う事は間違っているのだとい事を知った。このような考えを基にしていくと間違っているものや誤解を生じているものは多々あるように感じた。もちろんそれらの考えにも根拠や理論付ける事柄はあるのだろう。しかし、少なくとも今回三重野先生のお話を聞いて、私は納得し、考え方が変わったことは事実である。

私が最近関心を持っていたことはインフレーターゲットについてであった。この事について以前賛成している人の話を聞いた事がある。実際、筋は通っていたが経済についてはほぼ無知である私でさえ疑問を持つ話であった。今回改めてその疑問が確信へ変わり、納得する事になった。本来、インフレの時にインフレーターゲットをなぜ今行おうとするのか。日本がデフレではないにしても決してインフレでもないだろう。それが引っかかっていることだった。他人事として言ってしまうと、インフレではない国がインフレーターゲットを行った姿を見てみたいが、現在の日本でそれを実行されると更に厳しい状況陥ることが予想されるので現実化しないことを望んでいる。この事については、今後も少し調べていきたい。

次に、構造改革についても私は間違った解釈をしていた。これはお上の人間たちが行うことだとばかり考えていた。実際には、民間、つまりは自分たちが行っていくことだと言われ自分の甘さに気づく事ができた。他人任せにしていれば何とかなるとい考えで、まさしく危機意識が足りなかった。考えてみれば、自分の住んでいる国、またこれから社会に出て働こうとする日本の経済を自分たちで変えていかなければいけないことは当たり前のお話である。

私が疑問であることは、企業が苦しい経営の末、リストラばかり行っていると、結局新たな発想をする人間もいなくなってしまう、その企業の発展への道は無くなってしまうのではなかろうかということである。企業は自分で自分の首を締め付けているように見える。

その他、日本の景気を回復するためには不良債権問題を片付ける事が大切だとい事も誤解であった。

三重野先生がおっしゃっていたすべてが逆であるということは裏付けられることばかりであった。その中で大切なものは「信頼」であるとのことだった。今の私が経済を見極めるのは難しいように感じてしまうが、信頼を作る努力はできるだろう。この当たり前のように考えていた信頼を得る努力をする事が、日本経済の活気を取り戻すための第一歩へ繋がるということを学んだ。

2.日本人として

今の学生は考える力がないという私も何も考えずに言われた事を納得してしま事が多い。だから上記で書いたように間違ったことを真実として受け止めてしまうのだろう。そう考えると、知らぬ間に私の人生が他人に決められているような気持ちになった。自分の生きていく道は自分で考えながら進んでいきたい。これからは受け止める気持ちと疑問に思う気持ちを持つようにしたい。

三重野先生のお話を聞いて印象に残っている言葉は「自分に逃げるなど言い聞かす」、「人生は何かのプロになること」というものだった。今の私がプロだといえるものは、思い浮かんでも人に言えるようなものではない。これを自信持って言える日がくるまで努力していきたい。

また、本が好きなので幸いにも読むことは苦痛だと感じない。しかし、本を日本語として考えたことはなかった。日本人として自分の国を知る必要があることを改めて知った。

今回日銀を訪問して勉強になったことは多々あった。しかし、それらを学んだ事より、一人の人間として三重野先生にお会いしたことのほうが大きかった。数時間だったが、お話を聞いていてもなぜか楽しい気持ちになった。なにより、日銀の総裁という立場になった方が想像とは全く違った。しかし、三重野先生のような方だからこそ、人はついていくし、日本のトップに立つことができるのだろう。今回お会いできたことは、これからの私の人生で大きな糧とらえらるし、良い意味で大きな影響を与えられることになった。

三重野先生の話聞いて

3年 戸井 俊夫

自分の人生の中で日銀の総裁に会えるとは夢にも思わなかった。なぜなら、総理級に一流の方だからだ。会えるにあたって、どのくらいの器なのか、考え方はどうなのか、難しい方なのかなどワクワクドキドキしていた。三重野先生を初めて見たとき、失礼な言い方かも知れないが一流なのに一流の感じがしなかった。もっと言えば、ふつふのやさしいおじいちゃんという感じがした。しかし、三重野先生の話聞いたとき、当たり前だが言葉に重みを感じた。まとめてみると、一流の方というのは一流ぼくない。しかし、話をしてみるとスケールが大きく説得力がある。これが、初めて一流と言った方にあつた印象だ。三重野先生は、主に今後の日本経済について話して下さったが、それよりも自分が言葉に重みを感じたのが以下の2点である。

- 1, 自分で考える
- 2, 相手の立場を考える

自分は、もう21歳で世間一般では大人だ。自分で考えなければいけない年齢であり相手の立場を考えることも必要な年齢である。言葉で言うのは簡単である。三重野先生の話聞いていたとき自分を客観的に考えてみた。自分は言いたい意見もある。しかし、それをうまく表現できてないと感じる。三重野先生は本を読めば考える力が付くよと話して下さった。確かに本というのは、活字を読むのでそこで考えることができ、感じることができると同時に様々な表現が身に付く。本を読むということは考えるといふ近道だと思ふ。しかし、自分はそのだけでは駄目だと思ふ。本の知識しかなくなるからだ。だから、本だけに考える力を求めるだけでなく、様々な分野の一流の人に会うことも大事だと思ふ。なぜなら、三重野先生に会えたことを例にしても自分の考え方に影響を与えてくれるからだ。この二つを、実践していくことが自分を高められると同時に考える力が付くはずだ。そして自分が思ったのは、物事に常に疑問を持つということだ。それも、考える力の一歩だと思ふ。

そこで疑問に思ったのは、三重野先生は「空洞化」は受け身で受け止めるのではなく「高度化」への道として積極的に認識すべきと言っている。確かに、空洞化になると言うことは海外に直接投資をしていると言うことだから高度化と言ってもまちがえでない。しかし、日本人の就職が少なくなるはずだ。なぜなら、力仕事などは外国人にもっていかれ、頭のいいヤツは残れるが、中間にいた人たちの就職がなくなる可能性があるからだ。いくら、少子高齢化で今後就職ができる状況になっても日本人の就職が少なくなる。日本国内が混乱するのではないかと考える。だから、あまりにもプラス思考に考えすぎではないかと思ふ。その点について聞いたかった。しかし、会えるチャンスもないので自分で考えようと思ふ。

三重野先生の話聞いて

2年 遠藤 裕史

日本銀行へ行き私はとても良かったと思っています。三重野先生の話で私が一番考えさせられたのが、経済のことではなく社会に出てからの「プロ意識」「いたわり」と今の学生は自分で考える力がない」ということです。私は今回三重野先生の口からこのようなことが出てくるとは思いがなかつたので少々戸惑いました。私の公務員に対するイメージは先生の言葉とは正反対のイメージしかなかった。良いイメージではなかつただけに、とても驚き、嬉しくもありました。三重野先生がどのように日銀総裁になられたのかということが聞いてとてもよかったです。

これからの日本経済とい資料について私が聞いてみたかったのが、今の日本は競争社会なのになぜ国は銀行や企業に税金を使うのか？ということ。私の考えは、どんどん弱い企業は潰せばいいと思っています。銀行も潰すべきだと考えています。なぜならばバブル時代に後先考えず融資をしてしまう 受けてしまう その結果であり自業自得であると考えています。銀行がつぶれれば企業も共倒れしてしまいますが、それをつぶれそうな銀行に融資を受けていた企業側の責任であると考えています。銀行が潰れても本当に強い企業は生き残り、本当に強い銀行も生き残り私は考えています。この事について、三重野先生にお聞きできなかったのは残念ですが、お聞きした中で私が知らなかつたことが沢山ありました。たとえば不良債権をなくしても景気は良くならないということにはとても驚きました。私が考えていたのは、不良債権をなくせば銀行の貸し渋りがなくなり中小企業も蘇ると考えていたからです。コーポレートガバナンスの重要性も今まではあまり考えることがありませんでした。しかし今から社会に出るに当たってこのコーポレートガバナンスはとても重要だと感じました。就職した会社の経営陣が意識改革をしていないとその会社は潰れてしまう そのような会社に就職しないように日頃から自分なりに考えた生活をしていこうと思います。指導者は若い人のほうが良いという考えにはとても共感しました。私も以前からそのように考えていました。国会議員の大多数がもう弁をとって20年後生きていない人が本当に日本のことを考えているかといえば、私はそうは思いません。自分のことだけを考える人が、日本の社長、国会議員には多すぎると感じます。そのように三重野先生も考えられていたので、とても嬉しく思います。経済と構造改革はりょうにらみでなければならぬ、ということもよく分かりました。私は今までまず構造改革その次に経済とい考えだったので、自分が間違っていたことが分かりました。日本は今成熟経済である。だから今までのやり方では通用しないという事も分かりました。これからは私たちがしっかりしなくては行けないと これらの話を聞いて感じました。

今回日本銀行へ行き、三重野先生の話聞き、私はとてもよかったです。日本銀行の中に入るのは、多分もうな にどらうと思っています。日本銀行の中を見ただけでも、とてもよい経験になりました。私が想像していたよりはるかに豪華でした。三重野先生の話もとても分かりやすく、そして私はとても考えさせられることが多かったような気がしています。私に貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。

日銀訪問・三重野先生の話聞いて

2年 栄村 沙也可

まず、日銀訪問という素晴らしい機会を与えてもらったことを、とても感謝しています。直接、三重野先生の話聞くことができ、これまでの人生の中の貴重な体験となりました。

後にも先にも、このような体験をする事はできないと思う今回の対談？はすごいことだなと思います。

私が三重野先生の話の中でとても印象に残っていることは、構造改革の主体が民間だと言われている、今、

学生である私たちに何が出来るのかとい質問に対して言われたことです。始め、訪問前に三重野先生の講義の資料を読み、今の私たちに何が出来るのかすごく気になり、ぜひ聞いてみたいと思っていました。何か答えをいただけるのかと思いましたが、三重野先生は、その質問に対して、自分で考えなさいとおっしゃいました。最近の人は自分で考える力が足りないと言われ、自分の事を考えさせられました。私は、分からない事があつたら自分で考える前に、すぐ誰かに答えを求めてしまいます。今回もこれからの日本経済を良くしていくために、自分で考えることはなく、私たちにできることを聞きたいと思っていました。すごく情けないなと思い、恥ずかしくなりました。これからは、分からない事があつたらまず考えて、自分で答えを見つけられたらと思います。

もう一つ印象に残っている話があります。三重野先生は、何事からも逃げないことが、プロになる。と言っていました。私はしゃべりのプロになりたいと考えています。プロになるためには、その分野を伸ばしていけばいいのと思っていました。はっきりいって今の私は、辛いことは後回しにしてしまい結局しないということも、多々あります。いつも菅原先生がおっしゃっている事と同じような事を三重野先生も話されました。今、私がやっていること全ては、直接将来には関係ないかもしれませんが、辛いことから逃げないことは、成功への近道ではないかと思えます。

経済の話は、まだ私の中に知識がほとんどないので、難しく感じました。しかし、事前に読んだ資料や、三重野先生の話は分かりやすく、これからの経済に興味をもてました。

今、日本は不景気だと言われています。しかし、民間は危機感を持ってないと話されました。私自身も、今の日本経済に危機感を持っていません。今の私たちは、直接経済に関わることはできないかもしれませんが、現実に行き起きている状況を理解し、この先社会に出たときに知識などをいかせたいのではないかと思います。恥ずかしい事なのですが、今日本がどのような構造改革をしているのか、ほとんど分かりません。まだ、経済のことをあまり理解していないので利口な質問も考えることもできず、話を聞いていても難しいことばかりで、まだまだこれから学ぶことは、たくさんあるなと思います。今回の三重野先生の話はとてもためになりました。少しですが、現在の日本経済を理解できた気がします。

今回の体験をこれからの学生生活に活かし、ぜひ積極的に取り組み日本経済を理解し、世界にも目を向けていきたいです。最後にこのような機会を与えてもらえ、三重野先生の貴重な話を聞けた事を、本当に光栄に思います。

日本銀行を訪問して

社会科学部社会科学科 2年 関根 大輔

2月6日に日本銀行を訪問することになった。私が事前に日本銀行について知っていることと言えば、貨幣の製造をしていることぐらいであった。実際に訪れてみると驚いたこと、感動することがあった。まず東京駅から歩いて行ったのだが、歩いて行くと高校の時に使っていた資料集に掲載されているような建物が見えてきたのである。私は自分の目で日本銀行を見たことが無かったので思わず「あっ！」と口にしてしまった。また訪問する前に学生達が集まったのだが、そこで3年生の今村君が日銀の総裁というのは総理大臣級の人だよと言っていたので、とても緊張していた。日本銀行の中に入るとさらに緊張が高まった。

会議室に案内されて三重野先生のお話を聞くことになった。実際に三重野先生にお会いしてみると自分の想像よりはるかに気さくな方で、驚くと同時に緊張が少し和らいだ。三重野先生のお話は、日本の経済に

対する診断は間違っている。構造改革は民間が主体で行うべきであるということであった。政府、小泉首相の仕事は構造改革をしようとしている民間の手助けであるということである。マスコミから得る情報とは違うことをおっしゃっていた。私はマスコミから得た情報を考えることなく鶴呑みにしていたので、三重野先生のお話しには驚いたが、後で考えてみると全くそのとおりである。やはり経済の主体は民間なのである。民間が動かないと政府として動けなのだ。しかし日本的な経営システムは古く若返りが必要なのである。

また三重野先生のお話しの中で最も印象に残っている言葉がある。それは、「人生は逃げてはだめ。プロを目指す気持ちが必要である。」という言葉である。私は今まで20年間生きてきて色々なことをやってきた、そんな中で上手くはなりたかったことはあったがプロを目指すと思ったことは一度も無かった。やはりプロを目指すという気持ちを持つことが自分自身を高めていくのだ。一流の人と普通の人差はそのような気持ちの差なのではないだろうか。

三重野先生は「今の大学生は考える力が無い」ともおっしゃっていた。これはまさに今の自分に向けられている言葉であった。大学に入ってから今まで何も変わらないでいたので、特に勉強に関しては一番必要なのに考えるということをしてこなかったのととても情けない気持ちだ。

今回の日本銀行訪問で得たものは、とても大きなものである。一流な人の、一流な言葉にはとても重みがある。今日本は戦後で最も大きな変換期である。その時代を担う世代である私達に寄せられる期待は大きなものである。しかし今の自分はその期待に答えられるかというと、首を立てに振ることはできない。そんな中で今回のような貴重なお話を聞くことができ、今のままではダメだと気がついただけでも前進である。これからさらに前に進むためには何が必要なのかを考え、考えた上で行動していきたい。貴重なお時間ありがとうございました。

日銀レポート

2年 中村 光一

三重野先生の話聞き、まず思ったのは政府、自分を含む国民の今の日本に対する危機感の足りなさ、構造改革の必要性に対する意識の欠如といった、意識的な問題を感じた。言い換えれば、構造改革が小泉政権が出来てから思うように進んでいないのは、危機感が足りないからなのでは、とらことさを感じた。また、以前は政府が危機を察知し、迅速に動かなければならないと考えていた。しかし、実際に構造改革の影響を最も受けるのは政府でなく民間であるということを国民一人一人が理解し、その上で社会貢献をしていかなければならないということに改めて気付いた。そして、民間(企業)の成長が構造改革を進めていく軸となるのはわかりきっているのだから、ここで民間はどのように社会に貢献していかなければいけないのか考えていく必要があると思った。

そうした場合、まずは今後の企業の在り方について考えなければならない。これまでのように、じっと景気がよくなるのを待っている企業はそのままじっとしているだけで終わってしまうので、眠っている企業はおいしくしかないのではないだろうか。眠っている企業をそのまま生かし続けるのは、不良債権が新規に発生するだけで、今問題となっている不良債権問題をさらに悪化させる。なので、不良債権(過剰債務)を抱える企業は基本的には叩いていくべきである。

そして、これからは企業は生き残りをかけ、「もう後がない」ということを意識していかなければならない。

これらを考えた上で企業は改革を進めていかなければならない。改革とは、企業の今までやっていたこと根底から変えるということである。製造業を例にすると、ものづくり方を変える。場合によってはつくるもの自体を変えるといったことである。企業は生き残りをかけて最良の策を見つけ出せなければそのまま潰れていく。また、これから行われるべき構造改革では今までにない競争社会になることも予想され、たとえその企業が最良の策を見つけ出したとしても生き残れるとは限らないのである。

そこで、政府の役割として「セーフティネット」の構築が望まれる。競争といくらいたから、勝者もいれば当然敗者も出てくるであろうし、むしろ今のままなら生き残れる企業の方が少ないと思われる。敗者になれば、それは当然職を失うということになる。それでは、街中に失業者が溢れてしまう状況が生まれかねない。失業者が増加したのでは、景気回復どころではなくなり、マイナス成長の下で構造改革を進めなくてはならないという状態に陥り、最悪の場合、構造改革が進行しなくなってしまう。

したがって、構造改革、即ち、より高度な競争社会を目指すためには、セーフティネットの構築は最も重要な要素だと考えられるのである。これまで、具体的にこの話が進んでいないのは、まさに政府の構造改革に対する意識に欠如の表れである。これらのことは、国民一人一人の理解が前提となって成り立つことである。また、国民の意識を変えるのに大きな力をもつのがマスコミである。これからは、マスコミが構造改革の必要性、中身をしっかりと分かりやすく国民に訴えかけていくこと望む。そうすることにより、構造改革に対する国民の理解も高まり、政府も今まで以上に危機感を抱き、現在の不透明な日本経済から一歩前へ進めるのである。

次に、「日本が国際的な競争力をつけるためには？」ということがしきりに言われているが、具体的な策があるわけではない。近年、アジア各国の工業化により国内生産品と比較しても見劣りせず、しかも安価な製品が次々と日本へ入ってくるようになった。このことにより、日本製の同種の製品も価格を下げていかなければならなくなり、企業の業績不振につながる。さらには、企業の人員削減（リストラ）につながっていく。したがって、海外から安価に輸入される製品に対しては、それに対抗できる製品をつくる企業努力をしていくしかないと思う。そのために国内産業を守るために、製品開発の一定期間だけ保護貿易を実施することも、政府が行う政策として考えても良いと思う。いずれにしろ、今の日本は前例のない経済の低迷期に入っているため、どこかで国民一丸となり潜在的な力を発揮しなければ現在のこの局面は乗り切れない。

最後に、今の学生は考える力が足りない」と先生が話の中で触れた。このことは自分にも当てはまることなので、これから考える力をつけられるように、本を出来るだけ読み知識を蓄えていきたいと思う。

三重野先生の話しを聞いての感想

2年 村松翔子

日本経済について三重野先生のお話を聞いて、本当に貴重な体験ができました。私自身、経済についての知識は全然ありませんでした。しかし、「これからの日本経済」を読み、そして三重野先生のわかりやすいお話を聞くことにより、少しでも理解することが出来たような気がします。本当にすばらしい時間を過ごすことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

三重野先生のお話を聞くことにより一番感じたことは、三重野先生がおっしゃっていたように、現在の日本経

済の現状をきちんと把握することが重要なのだと感じました。そのなかでポイントとなることは、現在の日本の経済は発展経済から成熟経済に変わっていることの認識だと思います。経済の形態が変わってきているのに、私たちの対応が今までのままでは景気が良くなるはずがありません。そのことを踏まえたとえで、成熟経済に対応できるような力を付けていかなければなりません。これまでのデフレに対しては、貨幣流動性を上げれば物価も上昇していました。しかし、現在の日本経済にはすでに過剰なくらいの流動性がだぶついています。なので、現在の日本経済にこれまでと同じような対応をしていては、景気が良くなるはずがありません。三重野先生が、「今の日本の政府がやっていることは全部反対のことなんだ。」とおっしゃっていたことを、政府は気がつかなければならないと思います。

そしてさらに大切なことは、政府よりも何よりも民間が主役であるということです。政府が何かしてくれるのをただじっと待っているだけでは、日本経済は悪化していく一方です。何もしないでただじっとしているだけの企業は、きっと生き残ることすら不可能でしょう。これからの日本の経済を変えていくのは政府ではなく我々だ！という意識改革が企業に一番必要なものだと思います。企業において何が重要なのか？と考えたときに、それは、変化の中でも変わらず収益をあげることとおっしゃっていた三重野先生の言葉のには本当に納得しました。やっぱりどんな時代の流れ、経済の流れにも対応して進んでいくことが大切なのだと感じました。そのなかで、これからは若い人の力は必要になってくると思います。これから社会に出て行く人は、今までの発展経済を知らず、成熟経済の中に飛び込んでいきます。それは不安もあるけれど、プラスに考えてみると、今までの発展経済を知らないぶん成熟経済に対応しやすいのではないかと思います。発展経済のなかで仕事をしてきた人は、発展経済に慣れてしまっているのになかなか新しい考え方をするのは困難なように思います。そのてん、これから社会に出て行く人たちは、発展経済に順応しやすいだろう、新しい考えも出やすいのではないかと思います。現在のような今までにないようなデフレには、今まで考え付かなかったような政策を持ってやっていかなければ、状況は絶対に良くなるはずがありません。何もしなければ何も変わらないし、政府がやってくれることを期待していても無駄なような気がします。

そして、政府でも企業でもない私に何ができるだろうとらことを考えました。正直、私は全然と書いていいほど経済に興味がありませんでした。しかし、私もあと二年もすれば社会に出て行きます。自分には関係ないと知らないふりはできません。三重野先生がおっしゃった「最近の大学生には自分で考える力がない。」との言葉は自分自身にすごく当てはまると思いました。何でもかんでも他人まかせにしている、どうにかなるだろうとものごとを正面から受け止めず、自分で考えることをしていませんでした。しかし、社会で生き残れる人材になれるようにも、もっと自分で考え、たくさんの知識を自分のものにしていきたいと思いました。